

## 解題 「文章の道」の学恩

近藤康裕

井上義夫先生の文業について、『評伝D・H・ロレンス』を評した福田和也氏の「日本近代は無駄ではなかった」(『新潮』九五年三月号)以上にそのエッセンスを的確に言い表した文章を私は知らない。ここで先生のお仕事について文章を書き連ねることは屋上屋を架することになりはしないかとの懼れも覚えるが、学部生のときに初めて先生の著作に触れ、二〇〇三年からは指導を仰ぐ「先生」として今日までその聲咳に接する幸運に与り得た者として、福田氏の書かれたことに付け加えて蛇足にならないと思われるいくつかのことを以下に記してみたい。

四〇年近くにわたって大学で教鞭をとり、英文学に関する論文を執筆されてきた先生のプロフィールのひとつが「研究者」であることに間違いはないが、それが先生の文業をもっとも適切に表す言葉であるとは思われない。私が初めて読んだ先生の著作は、一九九九年に出された『村上春樹と日本の「記憶」』であった。その本の袖の著者紹介には、「研究者」としてのお仕事の代表作である『評伝D・H・ロレンス』と『ロレンス——存在の闇』が記されていたが、当時私は英文学の研究にさほど関心を持っていたわけではなかったためすぐにはこれらの本に向かわず、村上春樹論の初出であった「文藝誌」を大学の図書館の棚に求めると、まだ製本されていない比較的新しい号に先生の「記憶の歩み——「川端康成」の誕生」を見出したので、このようなお仕事をされる方は「研究者」というより「文藝評論家」と呼ぶほうが相応しいのではないかと思っていた。ちょうどそのころ江藤淳が自刃したのに衝撃を受けたが、当時の私にとって「文藝評論家」とは江藤淳であり、福田和也であり、やや遡って小林秀雄のことだった。もちろん同時に江藤淳は英文学「研究者」であったし、福田氏も仏文学の「研究者」である。

その『村上春樹と日本の「記憶」』には、システィーナ礼拝堂の天井画を描いたミケランジェロも「銭湯の浴槽の壁のペンキ絵」を描く「ペンキ屋」も英語では「ペインター」という単語で表されるという一節があって、読んだ当初から印象に残っ



構想することの叶はなかった事態」に「英国の滅亡」の「神話」を指摘し、ボーイスカウトの創設等につながる所謂ディジュネレーション言説から福祉国家の由来と『自由主義国イギリスの奇妙な死』に至るまで、小説の場面や人物の構成を条件づけた社会的要因に論及することでその「神話」を的確に歴史化する手法は、「没落は既に覆ひ難い段階に達し」た文明の窮状を文学の批評を通して批判するF・R・リーヴィスらの英国の批評の伝統に則りつつ、リーヴィスが陥った文化悲観主義を周到に回避した冷徹な学問的方法である。これは、「時代はこれからどんどん、どんどん悪くなっていくと思う」と言い、「経済的にも精神的にも」来るに違いない「崩壊」を「しっかり見届け、精神の復興にはたして小説が寄与できるか」と語った村上春樹の言葉を引きながら、戦後日本が抱えた問題とのこの作家の格闘のありようを「ロシア士官論」と同様の精緻な読みで炙り出し、こうした「宿命」に至りついた者を、顧みて人は天才と呼び、偉大な個性と呼ぶだけのことなのである」という言葉で結んだ『村上春樹と日本の「記憶」を貫く読みの方法と通底している。『ハワーズ・エンド』論の冒頭には、「宿命」としか呼べぬものが、一人の作家を振ち伏せようとし、それによく抗し得た者だけが偉大な作家になる」という印象的な一文が置かれているが、この見方は村上春樹論のみならず、「一人の作家を振ち伏せようとし」た歴史と「それによく抗し得た」「天才」であり「偉大な個性」であったD・H・ロレンスの「宿命」を、厳密な資料調査とその読解、作家のあらゆる文業の精読にもとづいて壮大な規模で描き出した『評伝D・H・ロレンス』の骨格をなすものでもある。

『評伝D・H・ロレンス』は、文学の研究書であると同時に歴史の本でもある。この意味において、文字どおりこの三巻は破格の書である。文学研究の領域で作家論の行き詰まりが叫ばれるなかで、ロレンスという紛うかたなき「天才」を論じて「歴史」を叙する先生の方法が、作家の「天才」を言い募ることで精読も批判も棚上げにしてしまうような「還元論」とは無縁のものであることは言うに及ばず、『ロレンス——存在の闇』の「はじめに」において既に述べられていたように、「隆盛を極めているロレンス研究が誤解に基づいた「ロレンス神話」を抹消することに疑いの余地はない」としつつも、「ロレンスが社会に受容される日は、同時にその文学の毒が薄められ、新しいロレンスの虚像が生まれる日であるかも知れない」との認識にもとづいて、その「毒」を覆い隠すことなく、歴史的事実の慎重極まりない検討を重ねて根柢から「ロレンス神話」を粉砕したのがこのロレンス評伝なのである。後から顧みてここに史料のテクスチャリティと歴史叙述の問題や、文学と歴史のインタ

テクスチュアな関係といった所謂ポストモダンのテクスト論などを見出すことは可能だが、こうした議論へとつながるものをこの評伝が孕んでいるのだとすればそれは、「一人の作家を振ち伏せようとし」た「近代」という時代を、文学や歴史といった既成の枠組みに囚われず「大所立って中央突破し」得た「批評」（『村上春樹と日本の「記憶」』に引かれた村上の言葉）がおのずと辿り着いたポストモダンへの洞察の鋭さの結果である。『評伝D・H・ロレンス』は、都築忠七名誉教授の『エリノア・マルクス』や『エドワード・カーペンター伝』、桶谷秀昭氏の『昭和精神史』を生み出した一橋大学の豊かな歴史研究の土壌に育まれた伝統の精華である。

先生が論じられてきた作家たちは、ロレンスと村上春樹をはじめ、ロレンス・ダレル、保田與重郎もまた、「近代」と格闘して作をなした人たちである。保田與重郎全集の月報に書かれた「某日、保田氏に至る」には、大学院生の頃に「来る日も来る日も」「小林秀雄全集を繙」いたのち保田の著作集を読んだとき、「長い階段を登りつめて保田與重郎に届いた気がした」と記されているが、この「保田氏に至」った経験は、「保田與重郎の現在」のなかの言葉を使えば、「小林秀雄が堂々めぐりを繰り返しつつ脱出を図らざるを得なかつた世界」である。「西洋近代」が手に入れた不毛な袋小路」の所在を、小林秀雄が「ヴァレリーを自ら生きる過程で」自身を「西洋近代」の課題に曝したのと同程度の濃密さで小林の著作を先生「自らが生きる」ことによって初めて見出すことが可能になった、読みの努力の成果である。研究対象の経験を「自ら生きる」ことが要請したところ、作家を生み育てた土地を自らの脚で歩き、能う限り入念に資料を調べ、その作家の「生命の漿液」（『村上春樹と日本の「記憶」』）としての作品をつぶさに読み込むという、先生が実践されてきたことに他ならない。「西洋近代」の「袋小路」を「脱出」しうる道を見出した作家たちは、ダレルがヨーロッパと対峙して「自己と共に滅び、而る後に甦生する課題を負ふ文明の絵和」（『ロレンス・ダレルと現代の迷路』）をそこに見たように、現代の「文明」の「課題」を総体として捉え、その「甦生」のヴィジョンに「過去が蘇つて自己を主張する烈しさに等しい」「認識の深さと芸術の完成度」（『保田與重郎の現在』）の源があるような「天才」であり「偉大な個性」であった。「新しさが常に古への恢復であり、独創とも模倣とも異なる創造の機軸は、個人を超えたものの記憶を生きる当の個人によつてしか発現しないといふ洞察」に至った村上春樹についての本を芭蕉の言葉で結び、「與重郎が想像を絶する果敢さで「日本」に繋がる道を見出し、それを追体験する方途を後世に残したこ

とにある」「現在の私達にとつての幸福」を文章に認めて（前掲論文）、日本の古典文藝を生み出した古都の土と空気を先生ご自身が生きられているのは、ごく自然なことである。

先生の文章の魅力は、まさにインターテクスチュアルな時空間を古今にわたって無碍に往き来する自在さが、一糸乱れることのない日本語で綴られて、そこで論じられる作品が、「長い階段を登りつめ」るような読書と学究に裏打ちされた揺るぎない評価の階梯によって批評される点にある。一九九九年の一月から四月まで『新潮』に書かれた「文芸時評」はこの魅力をもっともよく体現しており、何度読んでも強く私の胸を打つ。その芥川賞受賞が話題となった平野啓一郎氏の第一作「一月物語」を評するに、「世ニ伯樂アリテ、然ル後ニ千里ノ馬有リ。千里ノ馬ハ常ニ有レド、伯樂ハ常ニハ有ラズ」という故事から作家と批評家との関係を論じることで切った口火を、「合戦絵巻を脱けたやうな駿馬が、浅葱の房飾りも涼やかに味爽の空に嘶いてゐる」と平野氏の登場を表現した文章で受けて始まる第一回の時評から、「西洋」を真似るつもりで馬子の衣装を買ひ揃へ、藁鞋履きの足下が見えなかつた明治以降の歴史を繰り返すしかな」くなった現代日本の文藝の「袋小路」を厳しい目で見据え、「この国の風土に根づいた「西洋」を突き抜ける力をも実感させてくれる」保田與重郎の文業と、「真正のリベラリストのフォースターが死者に縋らねばならなかつた」その「死者の扶け」の喫緊な必要性とに触れて閉じられる第四回の時評に至るまで、初めてこれらを読んだ私は、福田和也氏が『評伝D・H・ロレンス』を論じて言われたように、先生の「胸底にある力」「恐ろしく思う」ことを禁じ得なかつた。

この「胸底にある力」は、文学研究の道に入られた時の先生の覚悟に由来するのだと思う。大学院に進まれた頃、「既に自分で物事を思量し、文章を認めることが出来な」かつたというご自身に、ドミートリ・カラマーゾフの語る「なるほど学問はあるかも知れないが、お前は哲学者ぢやなくてごろつきだ」という科白の「ごろつき」を宛てがわれた（某日、保田氏に至る）「恐ろし」い覚悟である。この認識が驕らぬための謙遜であることは、「自己のうちに自己を見出すことの反復を生き」る「悪無限は悪無限によってしか破られることもない」と述べられ、「己の内において「死んだ奥浩平」を死ぬことによって、ほくらは「生きえたかも知れぬ彼」を生きねばならない」と書かれた、大学三年次の執筆になる「革命」に醸す青春——奥浩平論」を一読すれば明らかだが、こうした峻厳極まる覚悟なしには「物事を思量し、文章を認める」ことはできず、まして

「批評」は可能にならないということである。この覚悟と自己への厳しさは、「戦後といふ時間がそれと知らぬ内に咲かせた最も美しい花」（『文芸時評』）に譬えられる杉本秀太郎氏のエッセイに触れて、「『エッセイ』を書こうとする者は、生活を正しくして家うちを整え、広々と心を戸外に通わせながら文章の道に励むべき」（『わたしの「心の書」』）と書かれた先生ご自身が「生活を正しくして」実践されている「文章の道」の根柢にある態度そのものであり、福田和也氏が杉本氏のエッセイ集を評した文章で言及されている先生の「暮らしの高さ、落ち着き、静けさと緊張への深い憧れ」（『懐しい、精神の諧調』『文学界』九九年五月号）を支えるものである。その「暮らしの高さ、落ち着き、静けさと緊張」から聞こえてくるのは、奇跡のような構成を糸乱れることなく展開するバッハやハイドゥン、モーツァルトの音楽にも類えられるべき「諧調」である。「時代の先端を駆けりながらそれ自体既に「過去」である音だけが、未来の聴覚に生命の感触を響かせる」と村上春樹論に書かれた「過去」の「音」を、肅然として悠揚たる「文章の道」を通して私たちに届けてくださる先生の文業の響きは、「夜にして顕つばるとおくの幻は肅々として舞ひ光るらし」と詠まれたバルトークの音楽のごとく豊饒な土の匂いと妖しい光りを帯びて、ときに本号所載の「二等船室」のような小説という形式で「舞ひ光る」「幻」となって「顕」れもする。教育の現場から退かれても、その文業から「書く」ことを学びうる私たちは、先生の学恩に感謝して已まない。